

# 韓国調査にみるインタビュー調査方法の検討 —インタビュー調査によって学習者から引き出されたもの—

小河原義朗・笠井淳子(国立国語研究所)  
石井恵理子(東京女子大学)

## 1. はじめに

国立国語研究所では、2000年から国内外の地域(日本、タイ(バンコック)、韓国、オーストラリア(ビクトリア州)、台湾、マレーシア)を対象に、各地域・機関と連携しながら5年計画の大規模調査「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を実施してきた。

本調査研究の最も大きな目的は、国内外の日本語教育の学習環境と学習手段に関する実態について全体的な傾向を把握し、新たな観点から日本語教育の改善・支援・連携のための基礎資料を作成することにあつた。この点については、国立国語研究所(2004)など、これまで様々な形で成果報告を行ってきたが、本調査研究をもとに、今後の学習環境と学習手段に関する調査研究における調査方法のあり方、調査の内容・技術に関する検討のための基礎資料を提供することも、その目的の一つであつた。

そこで本稿では、本調査研究の方法の検討、特に韓国調査における学習者を対象としたインタビュー調査の方法について、インタビューによって学習者から何を引き出すことができたのか、あるいはできなかったのかという観点から検討し、今後のための基礎資料とする。

## 2. 韓国調査の概要

本調査は、微視的(個々の日本語学習や教育等)・巨視的(日本語教育が置かれている社会環境等)視点から、学習者・教師の双方を対象とし、主にアンケート及びインタビューの手法を用いて行った。その他に、教育制度や出版状況、インフラ状況等、韓国の日本語教育にかかわるマクロレベルの情報について、文献調査、現地聞き取り調査もあわせて実施した。

アンケート調査では、韓国全体を視野に入れ、ソウル、釜山、光州の3地域を核として2003年3~9月に実施した。高等教育機関(大学)については日本語・日本語教育関連学会を通じて、中等教育機関(中学校・高校)については各地域の教師会にあたる日本語教育研究会を通じて、調査協力校の選定、アンケートの配布及び回収を行った。学校教育以外の機関(民間)については調査協力機関を経て行った。学習者の有効回答数は6,739名(回答率91.9%)である(表1)。

表1 アンケート有効回答数(%)

	中等教育	高等教育	学校教育以外	計
機関数	45(47.9)	38(40.4)	11(11.7)	94(100)
学習者	3,177(47.1)	2,456(36.4)	1,106(16.4)	6,739(100)

特に学習者を対象としたアンケート調査では、学習者が日本語を学習する際には何らかの人・物・場や機会といった対象(以下、リソース)に接触すると考えられることから、学習者がどのようなリソースにどのように接触しているのかについて質問する項目が中心になっている。また、リソースの種類や接触の方法等に影響すると考えられる項目として、日本語学習歴、学習動機、訪日経験等についてもあわせて尋ねている。このアンケート調査結果の詳細については、国立国語研究所(2004)を参照されたい。

このアンケート調査結果を踏まえ、並行してインタビュー調査を実施した。アンケート調査では、韓国での日本語学習環境・手段を全体的に把握するために、大規模な量的調査を行った。しかし、全体像は把握できても、各学習者が具体的にどのようなリソースにどのように接触しているのかについて知るには限界がある。そこで、より具体的、個別的なリソースとの接触状況やそれに対する評価等について聞く、インタビュー調査を実施した。韓国調査では2回のインタビューを行っており、1回目は2003年9月、2回目は2005年2月に、本稿の筆者3名で実施した。インタビュー調査対象学習者の内訳を表2に示す。表2中、「その他」とは「大学生・大学院生以外(会社員等)」を示す。

表2 インタビュー調査対象者の内訳(人)

	1回目		2回目	
	大学	その他	大学	その他
ソウル	35	0	30	0
大邱	6	2	0	0
釜山	20	2	0	0
大田	25	0	0	0
天安	0	0	11	4
計	86	4	41	4

このインタビューは、量的に全体を把握しようとするアンケート調査を補完する質的調査として位置付けられる。筆者らが本調査のために現地を訪れた際に、限られた時間と場所の制約の中でインタビューへの協力が得られた学習者を対象に実施した。地域によってデータ数等にばらつきがあり、大学生が中心であるなど、データに偏りがあるのは、そのためである。インタビューは、以下に示したような調査項目をもとにした半構造化式インタビューとした。この調査項目は、事前に3名のインタビュアーに共通した項目として設定したものであるが、学習者やインタビューの展開によって、内容はインタビュアーの裁量に任された。

### 【インタビュー項目】

(0) 身分、訪日経験、日本語学習動機

- (1) 現在、どこで日本語を学習しているか。勉強を始めて、何年くらいか。
  - ・日本、日本人、日本語とのつながりはどうか(周囲の日本語環境：日本人をよく見るか等)
- (2) 日本語の学習は楽しいか。その理由は何か(他の外国語学習との違い等)。  
日本語のイメージはどうか。
  - ・現在受講中の日本語の授業についてどう思うか(内容、方法、教科書、頻度、時間、人数等)。
- (3) 授業の予習、復習、テスト勉強等、自分自身でどのように勉強しているか。
  - ・(勉強方法として挙げてこないものについて)それをしないのはなぜか。
  - ・授業で扱われること以外のことを勉強しているか。その方法は。
  - ・自分で勉強していて、何かわからないことがある時はどうしているか。
  - ・学習が大変な部分はどんなところか。
  - ・どんな助けがあれば、その学習が容易になると思うか。
- (4) 今後、日本語学習をどう予定、あるいは計画しているか。
  - ・日本語学習に対するやる気のもととなっているものは何か。
- (5) その他

インタビューは、3名がそれぞれ実施し、学習者と個別あるいはグループで行った。時間は学習者の都合に合わせて、一人30～60分の範囲で日本語で行った。そのため、今回対象となった学習者は日本語でインタビューを受ける程度の日本語力がある学習者である。インタビューはMDに録音・文字化して資料とし、分析を行った。

### 3. インタビュー調査方法の検討

#### 3.1. インタビューの結果

インタビューの結果について、インタビューの文字化資料をもとに表2の135名を対象として学習者ごとにマッピング(Margulies, 2002)の手法を使って示すと、図1のようになる。図1はある日本語学習者Aの日本語との接触状況について示したものである。図1は、学習者Aがどのような人(斜線で示した□)・物(網掛けで示した□)・場や機会(白色で示した□)に接触しているのかについて、学習者Aを中心に示したものである(以下同様)。

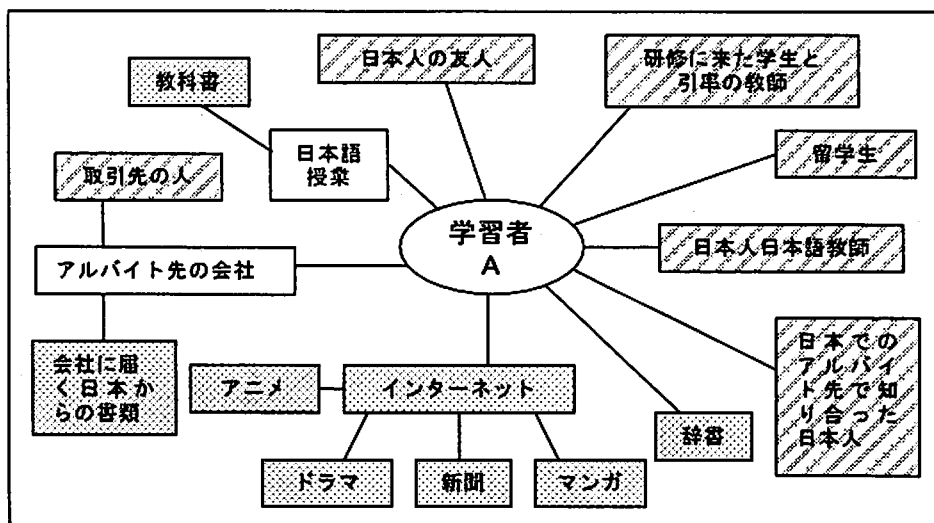


図1 学習者 A の日本語との接触状況

学習者 A は釜山の大学で日本語を専攻している大学院生である。人との接触としては、大学の「日本人日本語教師」「日本人留学生」「大学に研修に来た日本人学生と引率の日本人教師」と大学で直接日本語を使って接触している。さらに、日本への留学時に知り合った「日本人の友人」「日本でのアルバイト先で知り合った日本人」と e-mail を通じて日本語で接触している。物との接触としては、「辞書」の他に、インターネットを通じて日本語の「アニメ」「ドラマ」「新聞」「マンガ」を見たり読んだりしている。場や機会との接触としては、当然ながら「日本語の授業」があり、そこから授業で使う「教科書」に接触している。また、アルバイト先の日系企業で「取引先の日本人」と話したり、会社に届く「日本からの書類」を読んだりするなどして日本語と接触している。このように、約 30 分間という限られた時間でのインタビュー内容ではあるが、学習者 A が日本語の授業以外にも様々なリソースを通して日本語と様々な接触をしていることがわかる。

また、学習者の中には図 1 の学習者 A のように人・物・場や機会を様々に利用している学習者もいれば、図 2 の学習者 B のように物との接触が多い事例(網掛けで示した□が比較的多い)、図 3 の学習者 C のように場や機会との接触が多い事例(白色で示した□が比較的多い)が見られた。

具体的には、図 2 の学習者 B は釜山の学院で学ぶ高校生で、「音楽」を聞いたり、「テレビ」や「雑誌」「映画」を見たり、自分が書いた「作文」を何度も読んだり、直してみたりしている。また、「インターネット」を通じて好きな「アイドルの情報」を集めたり、「ドラマ」を見たりしている。

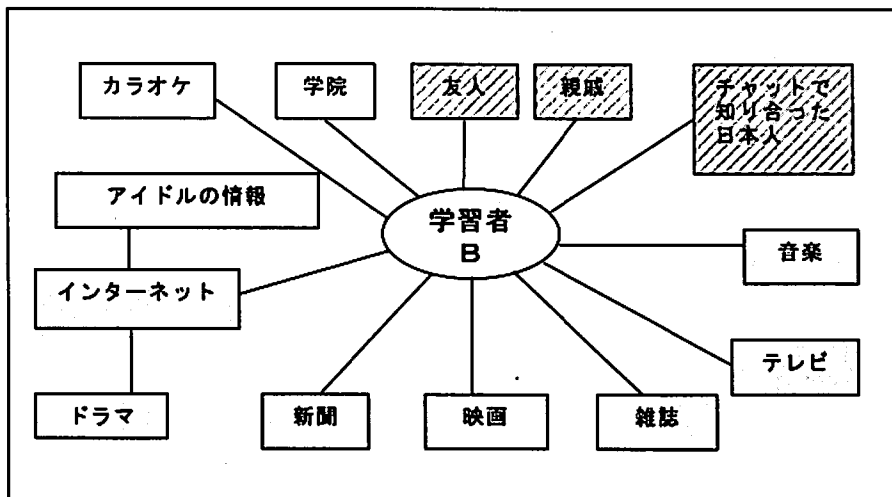


図2 学習者 B の日本語との接触状況

一方、図3の学習者Cは釜山の大学で日本語を専攻している大学生である。日本人家庭への「ホームステイ」に参加したり、2003年に韓国で行われた「ユニバーシアード」競技大会で審判や選手の通訳をしたり、「免税店」に行つて日本人に話しかけてみたり、「ボランティア活動」に参加したり、「学院」でも日本語の勉強をしたりしている。

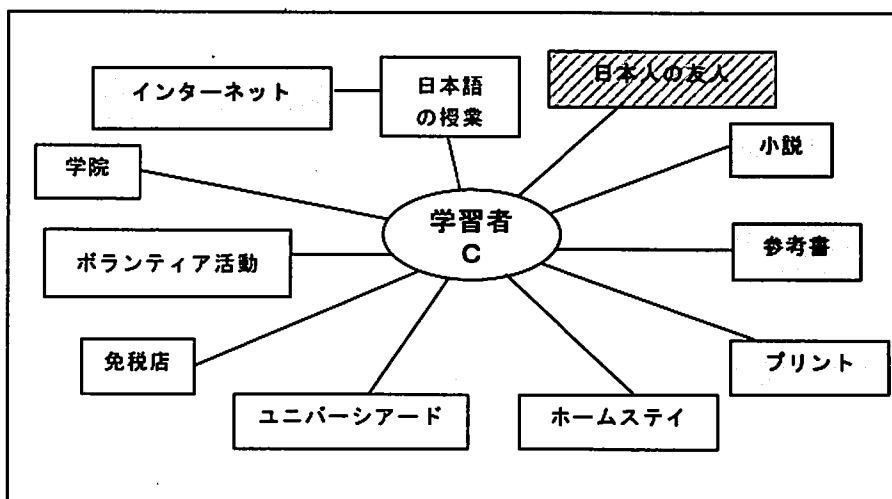


図3 学習者 C の日本語との接触状況

このようにインタビューによって、各学習者の置かれた学習環境や学習目的に応じた様々な日本語接触の様子が見られた。このことから、学習者は日本語の授業以外にも日常生活において身の回りにある様々な人・物・場や機会としてのリソースを通じて日本語と様々な接触をしているという、アンケート調査結果(国立国語研究所(2004)など)を学習者個別に具体的に示すものとなった。

しかし、日本語との様々な接触が起きている学習者とは対照的に、あまり接触に広

がりが見られない学習者もいた。図4は左側に図1の学習者A、右側に同じく釜山にある大学で日本語を専攻している学習者Dの日本語との接触状況を比較して示したものである。

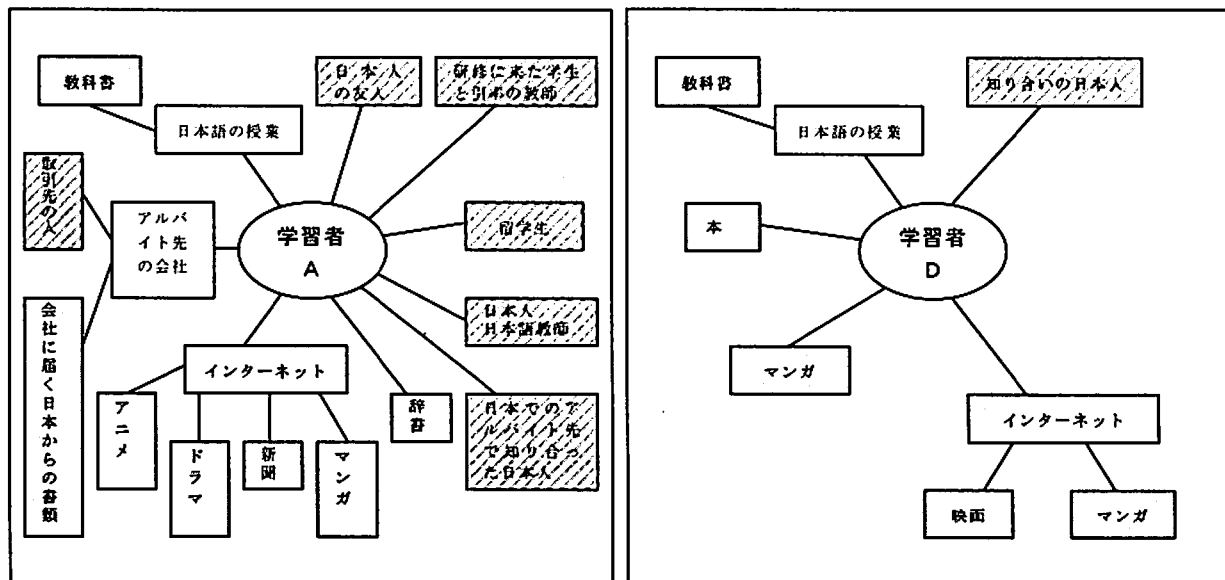


図4 学習者AとDの日本語との接触状況

図4に示したように、学習者Dは先の学習者Aと比べて、接触の範囲が狭いことがわかる。このように学習者間で接触の範囲に違いが見られる要因としては、まず地域によって日本語に関するリソースの絶対量に違いがあるという物理的環境の問題が考えられる。また、この学習者Aが大学院生、学習者Dが大学生というように、学習者の日本語レベルの違い、その他にも動機づけなど、様々な学習者要因が考えられる。

そのような様々な要因の中で、本稿では特にインタビューの方法自体による影響について、以下で検討する。

### 3.2. 第1回インタビュー

学習者の接触範囲の違いに影響を与えるインタビュー要因について、学習者の接触範囲が広い場合と狭い場合に分けて検討する。

まず、図4の学習者Aのように、接触範囲が広がったという結果自体は、学習者個別の接触対象や範囲について現状を把握するという意味では、限られたインタビュー時間ではあるものの、インタビューによって実現できていると考えられる。しかし、インタビュアーが学習者からなるべく多くの接触対象を引き出そうとすると、限られた時間の中ではそれらの対象に接触する理由、具体的な接触方法や接触に対する評価などについては十分なデータを得ることはできない。この点については、インタビュアーがその理由や具体的な接触方法などについて学習者からうまく引き出せなかった、あるいは、学習者の方でリソースに単純に接触しているだけで接触方法にあまり特徴的な工夫が見られない、接触に対する評価も意識的になされていないという場合には、

インタビュアーが意図的に他の接触対象に話題を切り替えるなどしたため、結果的に接触範囲を探るだけのインタビューになってしまったというケースも見られた。

一方、学習者 D のように、接触範囲が狭かったという結果については、接触範囲が広がったという結果同様、学習者の接触範囲が狭いという現状を把握できたという意味では有益な情報である。ただ、接触範囲が狭いという事実だけでなく、なぜ狭いのか、なぜ接触しようとししないのかなどについて聞くことは今後の具体的な支援や実践の改善に向けた示唆となる。

また、接触範囲が狭いのではなく、インタビュアーが学習者から接触対象をうまく引き出せなかったということも考えられる。例えば、以下は中国語専攻で日本語を選択している学習者に対するインタビューの一部である。I はインタビュアー、L は学習者を示す。

I: 今までの学生さんは日本語だったんですけど。

L: みんな、はい。

I: じゃ、中国語も勉強しながら日本語も勉強してるんですか？

L: ……勉強じゃなくて。

I: はい。

L: なんか興味があつて。

I: はい。

L: 中学生からずっと日本語……勉強したん……です。

インタビュアーの「勉強」という言葉に学習者は「勉強じゃなくて」と答え、以後この学習者は全体的に言いよどんだ発話になっている。この学習者にとって日本語は興味の対象であり、それを日本語の勉強として聞かれたことに違和感を覚えていると考えられる。つまり、学習者は日本語の「学習」や「勉強」のためにリソースに接触しているわけではないにもかかわらず、インタビュアーが日本語の「学習」「勉強」といった語を用いて接触対象を尋ねてしまったために、リソースをうまく引き出せなかったということが考えられる。リソースについて尋ねてもほとんど反応がなく、インタビュー自体が停滞していたところに、話の流れから偶然日本語の「マンガ」の話になった途端、日常的にたくさんの「マンガ」に様々な方法で接触している実態が語られ始めたというような事例があった。学習者の日本語学習に対する捉え方を踏まえ、日本語との「接触」に重点を置いた聞き方や具体例を出すなど柔軟に対応する必要がある。

以上、接触範囲の広がりという観点からインタビュー結果について見てきたが、そのような学習者の多様な接触状況の中で、アンケートの質問項目の一つでもあった「日本語の授業でどのようなものを使っているか」について尋ねたところ、「教科書」「ビデオ」「プリント」といった回答が多く、あまり多様性がない傾向がみられた。そこで、インタビューの対象となった学習者に共通した日本語に接触する場である「日本語の授業」(以下、授業)を中心にマッピングデータを見てみる。

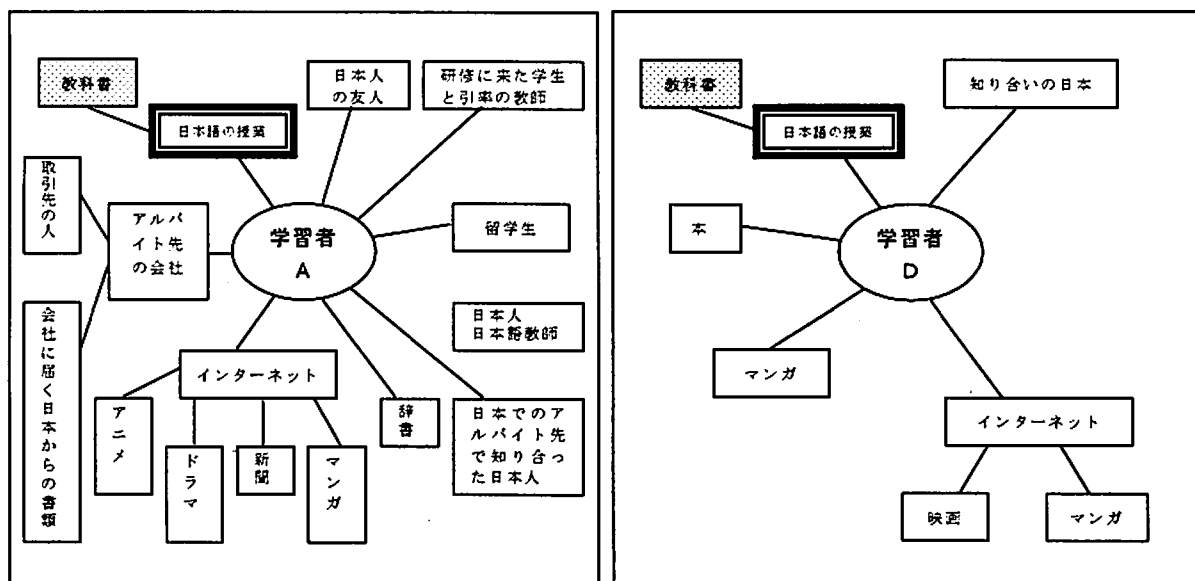


図5 学習者 A と D の授業を中心として見た日本語との接触状況

図5は図4と同じ学習者 A と学習者 D の接触状況を比較したものであるが、授業を中心にしてみると両者とも授業から他のリソースへの接触が広がっていないことがわかる。比較的接触範囲が広い学習者 A にしても、授業からは授業で使用している「教科書」のみで、他のインタビュー結果でも同様に授業から接触が広がっていない傾向が見られた。つまり、学習者は日本語の授業外で様々なリソースに接触している一方で、それらが授業における日本語の学習と有機的に結びついていないということが考えられる。もちろん、この点についてはインタビュアーが直接尋ねなかったためか、学習者が意識していないだけで、実際には授業での日本語学習が他のリソースへの接触につながっているということもある。しかし、授業を基にした接触の広がりについてこちらから直接質問した場合でも、そのような具体的な事例はあまり現れなかった。むしろ、「授業での学習と授業外での様々な接触は別である」「授業では成績のためにやっている」といった学習者の声が多く見られた。日本語の学習がコミュニケーションのための日本語習得を目的とした場合、その授業が基点となって、身の回りにある様々な日本語との接触の機会が広がっている、あるいは学習者自身からそのような機会を広げていけるような授業のあり方を検討することは、授業改善のための重要な契機となる。

この点に関して、インタビューの中から「インターネット日本語」「情報日本語」といった科目名の授業の中で日本語学習の手段や情報を提供するような授業展開によって、以下の表3のような授業外へと接触の広がりが起きている事例が見られた。



表3 授業から接触が広がっている学習者の事例(大学生3名)

地域	授業内	→	授業外
釜山	<ul style="list-style-type: none"> <li>・政治について日韓のホームページを見る</li> <li>・グループで発表する</li> <li>・おすすめのサイトなどを紹介しあう</li> </ul>	→	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家に帰っても一人でホームページを見る</li> <li>・自分の考えなどをまとめてみる</li> </ul>
釜山	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームページに掲載されている新聞記事を読む</li> <li>・それに関する討論を行う</li> </ul>	→	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームページで頻繁に新聞記事を読む</li> <li>・チャットを使って意見交換を行う</li> </ul>
大邱	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターネットの新聞記事や「キッズ goo」(漢字を振り仮名付きで表示するホームページ)を紹介される</li> </ul>	→	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新聞記事を読む</li> <li>・ひらがなルビ機能を使って他の物も読む</li> </ul>

このようにして引き出されたものは、授業が授業の中だけで完結するのではなく、接触を広げる基点として授業を捉えなおすといった、授業の役割を改めて考える契機となり、授業改善のための示唆となる。しかし、このような観点からの質問は1回目のインタビューの際にはインタビュアー間で積極的に意識されていなかった。

### 3.3. 第2回インタビュー

第2回インタビューを実施するにあたり、基本的には第1回インタビューと同様の内容と方法を用いるが、前節で検討した内容を受けて、以下のことを踏まえた上で行った。

- ・日本語の接触対象や範囲だけでなく、接触の理由や具体的な方法、接触に対する評価に重点を置く
- ・接触対象や範囲が狭い場合にはなぜ狭いのかその理由を尋ねる
- ・学習者の日本語学習の捉え方に配慮する
- ・日本語の授業からの接触範囲の広がりについて尋ねる

以上の点を踏まえた上で実施した結果、もちろん学習者によるが、1回目のインタビューに比べて接触対象や範囲は狭いが、その対象に関する具体的な方法や接触理由など、上記の点に関わる詳細を引き出すことができた事例が見られた。

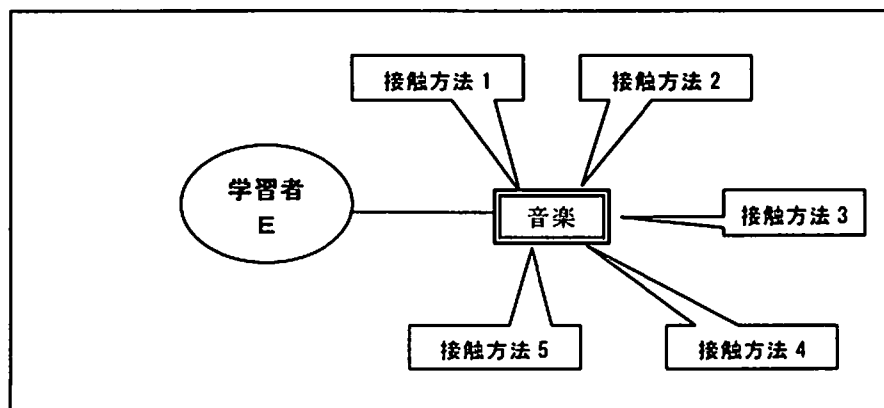


図6 学習者Eの日本語との接触状況

例えば、図6ではリソースは「音楽」だけであるが、他のリソースではなく、「音楽」

についてさらにインタビューを続けたところ、その接触について「勉強だと思って聞いていない。好きだから聞き、発音がわかるようになるし、その意味が知りたくなって、意味を調べる。それが自然と勉強になる。歌をひらがなで書き取り、元の歌詞と比べながら、発音と表記の違いを確認する。歌を聞いて発音を書くことで、話せるようになりたい。」と述べている。また、「音楽を聞くことは勉強ではない勉強だが、自分の日本語にはプラス」「自分は音楽が好きだから、自分には合っている方法」というように、学習者自身から自分の接触対象や方法についての考え方や学習観、評価について述べている。

さらに、日本語学習の開始時期、動機からインタビューを発展させることで、日本語のレベルや時間による接触対象、方法、評価の変化についての言及も見られた。例えば、学習者 E では「音楽」との出会いから接触の動機や方法に以下のような変化が見られた。

表 4 「音楽」への接触方法の変化

<b>中学時代</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・偶然日本語の歌に接触し、歌詞の意味が知りたくなる</li> <li>・兄の友人からひらがなとカタカナの表をもらい、韓国語と日本語の音の対照を知る</li> <li>・歌の歌詞をハングルで書いて発音してみる</li> </ul>
<b>高校時代</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の授業では教科書を一生懸命勉強すると同時に、授業外では音楽を繰り返し聞く</li> </ul>
<b>大学入学後</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分より日本語がうまく話せる人がいることにショックを受け、もっと勉強する</li> <li>・音楽は勉強だとは思っておらず、音楽が好きだから、聞きながら発音が聞ける</li> <li>・発音の意味が知りたくなり意味を調べ、自然に勉強になる</li> </ul>
<b>現在</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・いいと思った歌は歌いたいと思うが、歌うためには発音ができないと歌えない</li> <li>・ひらがなで発音を書き、わからない単語は調べる</li> <li>・元の歌詞と比べ、間違っただ所について検討する</li> <li>・韓国人にどうしてもわからない発音があり、それがわかるようになりたい</li> <li>・日本語が聞けることがうれしい</li> </ul>

授業についても、学習者 E は「大学の先生が勧める NHK の番組より、普通の言葉が出るバラエティなどを見たい。本も読むようにいわれるが、それは日本語だけでなく、教養を深めるために必要」と述べている。その他、「自分の日本語の学習にプラスになっているか」「他の人に勧めるとしたらどんなことか」といった質問についても、学習者 E は「人には勧めたいが、合わないこともある」「何でもいいから興味を持って!」と述べ、別の学習者は「自分が求めるものに合う学院を探し、そこでの学習によって 3 ヶ月で日本語能力試験 1 級に合格できた。決められた期間での目標達成のために『なぜ自分に合わないのか』理由を考え、自分に足りないところを探し、見つける。『これ、おもしろくないから、これをやってみようか』とやってみて、『これもおもしろくないから、またやってみようか』とやってみる、そういう興味や軽い気持ちでやるだけでは何にもならない」という明確な考え方を持っていた。

このように、インタビュアーから促されることなく、学習者から積極的に発話する

事例が、特に様々な接触方法を試行錯誤したり工夫したりしている学習者やそのような過程を経ることでかなり明確な学習観を持っている学習者などに多く見られた。このようなデータは、単に接触対象や範囲を聞くものと違い、前節で述べた、日本語の授業外でのさまざまなリソースとの接触と授業における日本語の学習とを有機的に結びつける上で、重要な示唆となる。

#### 4. まとめと課題

本稿では、本調査研究の方法の検討、特に韓国調査における学習者を対象としたインタビュー調査の方法について検討してきた。本調査研究におけるインタビュー調査はアンケート調査を補完するという位置付けではあった。しかし、それだけでなく、本稿で検討してきたように、現場教師が教室外で学習者がどのようにリソースを利用しているのかを知ることによって、学習者理解を進めることができ、さらにそれを通して授業での実践そのものを振り返ることにつながるという点で非常に有効であると言える。この点については、国立国語研究所(2006)などでも、多くの調査者から述べられている。

インタビュー項目や方法など、本稿で検討してきた点以外にも課題はある。まず、インタビュアーが学習者の母語でインタビューを行うに十分な語学力を持っていなかったため、ある程度の日本語力がある学習者を対象にせざるを得ないという問題があった。何を聞かれているか十分に把握できない、あるいは質問に対してある程度応答はできても、具体的な内容について日本語では表現できない、ということもあった。また、インタビュアーは学習者にとって初対面の外部者であったため、学習者との関係を作るための時間を必要とした。長時間のインタビューは難しいため、約30分という時間をどのように有効に使うかがポイントになる。そして、リソースとの接触には無意識に行っている場合もあり、それがその学習者にとって重要なリソースになっている可能性もある。しかし、それらを短いインタビューの中でどのように引き出すのは難しい課題である。

本稿では韓国調査を対象にした。しかし、リソースの利用に関わる物理的環境、「学習」の捉え方などには対象となる国や地域によって違いがあることから、インタビューの仕方も柔軟に変えていく必要がある。そのため、同じ方法で行った各インタビュー調査の結果について国別比較などの分析を行っていく必要がある。さらに、調査は一つの方法や視点からよりは複数の方法や視点から行うことが望ましい。アンケートで得られた結果とインタビュー結果をあわせて分析することで、相互で取り上げる項目を絞り込むことが可能になる。

最後に、本稿では取り上げなかったが、今回のインタビュー調査では韓国調査において第2回インタビューでインタビューした学習者が、その後日本に1年間留学したため、留学中にそのうちの4名について日本国内でインタビューすることができた。来日後、リソースの範囲やその利用方法が変化している事例が見られた。その学習者たちが韓国へ帰国した後、再度インタビューすることができれば、また興味深い結果が得られると思われる。今後の課題としたい。

## 参考文献

- 小河原義朗・笠井淳子・石井恵理子(2005)「学習者は何をどのように用いて学習しているのか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『日本学報』第65号1巻, 韓国日本学会, pp. 145-156.
- 国立国語研究所(2004)『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—韓国アンケート調査集計結果報告書』(日本語版・韓国語版)
- 国立国語研究所(2006)『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成17年度第2回日本語教育短期研修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』
- Margulies, Nancy 2002. *Mapping Inner Space: Learning and Teaching Visual Mapping*. Zephyr Press